

開かれた「民族」

－ ニューカレドニアのアラブ人村 －

堀 内 正 樹

はじめに

1. ニューカレドニアにアラブ人の村ができるまで

- (1) 発端
- (2) フランスとアルジェリアの文脈
- (3) アラブ人村「ネサデュー」の創始

2. 「前史」のなかで失われたものと残ったもの

- (1) 流刑者（第一世代）の時代
- (2) 第二世代以降
- (3) 失われたもの
- (4) 残ったもの

3. 復活を目指すもの

- (1) 組織の設立
- (2) なにを復活させるか
- (3) 復活と創造

4. 政治環境と民族表象

- (1) 国際先住民年と文化多様性条約
- (2) 屈折した事情
- (3) 民族表象

5. 開かれた「民族」

おわりに

はじめに

「民族とはなにか」という問いが文化人類学者や民族学者によって提起されてから久しい⁽¹⁾。その間に展開された多くの議論を簡単に総括すれば、ともかく「民族は存在する」という前提に立ち、言語や出自の共有といった客観的基準を導入して民族を定義する立場と、主観的な帰属意識を根拠に民族の存在を保証する立場の論争から議論が始まったとあってよいだろう。やがて双方の主張の相互補完性が認識されるようになると、客観主義と主観主義の対立はあまり意味のないものになり、やがて両者はともに民族が社会的文脈を離れて存在するかのような考え方、いわゆる本質主

義であるとして批判されることになった。そして社会的・政治的な文脈が民族を生み出すのだとする構築主義の立場が導入されたのである。そのような民族構築のプロセスが「名付け」(他称)と「名乗り」(自称)の交渉と競合の過程だということになる⁽²⁾。ところが、批判にさらされた本質主義であれ、批判したはずの構築主義であれ、民族は結果としてある人々と別の人々を分離する機能を果たすという想定だけは暗黙裏に両者に共有され、維持されてきているような気がする。アイデンティティという、他からの分離を示唆する言葉が終始亡霊のようにこうした議論にまわりついてきたことがそれを物語っている。

さて本稿が考えようとするのは、民族を名乗ることが人と人のあいだに境界線を引いて分離するのではなく、逆に一見無関係な人々を結びつけることになる例である。南太平洋のニューカレドニアに住む「アラブ」を名乗る人々の場合がそれである。かれらが「アラブ」を名乗るとき、それはふつう想定されるような周囲の社会からの分離や自己保存や自己主張を目指す閉鎖的な行為ではなく、むしろ民族の名乗りが人間関係を拡大させ、より広い社会空間の造出をもたらすことにつながっている。つまり民族が、これまでのような囲い込みや凝縮あるいは排他性のイメージではなく、拡散と開放のイメージをわれわれにもたらすのである。このことを開かれた「民族」として論じてみようというのが、本稿のねらいである。

そしてそれは、19世紀中葉にフランスの植民地政策によって故郷の北アフリカから遠く離れた地球の裏側の太平洋の離島に連れてこられ、そこに隔離された人々とその子孫の数奇な運命を紹介することになるのだが、単にそれだけにとどまらず、たしかにこの発端が植民地主義にあったにしても、今その場所で起こっている現象は、むしろかつてアフリカからユーラシアにかけての広大な世界で千年近く前から展開してきたごくふつうの人間関係のあり方ではないのかということ、したがってそれは民族という表象が、人間関係の本来のグローバルな展開に必要なある重要な特徴を備えていることを指摘することになる。それはつまり表象が内容の柔軟さとおおらかさ、こだわりのなさ、見方によってはいいかげんさを内包しているということである。さらにいえば、その特徴は、我々の閉鎖的な民族観念を醸成してきた百数十年間の「近代」という時代の特殊な認識システムをまたぐようにして、それ以前と以後に通底していて、広範囲に及ぶ融通性に富んだ人間のつながりを成り立たせる不可欠の要件であるだろうということ述べることになる。

1. ニューカレドニアにアラブ人の村ができるまで

(1) 発端

「アラブ」といえば中東・北アフリカの住民であり、せいぜい昨今のグローバリズムの波に乗って西欧や北米にも進出しているというのが一般的な想定であろう。だから、遠く離れた南太平洋に浮かぶ楽園のような島に「アラブ」の村があるという事実は意外性を呼び起こす。だがニューカレドニアの首都ヌメアから北に200キロほどのところにあるプーライユという市には実際にアラブ人の市長がいて、その郊外にはアラブ人を自称する人々が村を作って暮らしているのである。村の名

は「ネサデュー」という。

事の発端は19世紀中葉にさかのぼる⁽³⁾。そもそもの始まりは、フランスが発したニューカレドニア領有宣言にある。1853年9月にフランスの海軍准将がこの地を占拠して、フランスの名の下にこの島々を占有すると宣言して以来今日まで、ニューカレドニアはフランスの領土になっている。当時フランスは、あまりに過酷な自然条件下にあった南米ギアナに代わる罪人の流刑地を探していて、1863年にこの地を強制労働可能な土地と判断し、フランス本国から次々と流刑者を送り込んだ。その第一陣となったのが、後に述べる「アラブ人」を含む248名の「犯罪者」たちだった。第一陣の到着は1864年5月のことである。しかしフランスがニューカレドニアを法的に流刑地と正式に決定したのはその後の1872年であり、それは新規に法律を制定しなければならないほど切羽詰まった状況に当時のフランスが置かれていたからである。

(2) フランスとアルジェリアの文脈⁽⁴⁾

その事情は19世紀のフランス本国の政治情勢を大きく左右したアルジェリア侵攻のプロセスと不可分に結びついている。そこで話はさらにさかのぼって、ブルボン復古王朝のシャルル10世による1830年1月のアルジェリア出兵から始めなくてはならない。シャルル10世はアルジェリア海岸地域で活動していたフランス人商人の権益を守るため、それまで3世紀にわたってアルジェリアを統治していたオスマントルコの軍勢と対峙すべく、大量の兵をアルジェリアに送り込んだ。これが「アルジェリア出兵」である。ところがこの出兵があだとなり、同年7月には治安が手薄となったパリで七月革命を許すことになり、シャルル10世は自らの退陣とルイ・フィリップによる七月王政の誕生を迎えねばならなかった。しかし代わったルイ・フィリップ王もアルジェリアから軍を引かなかったためフランス本国は極度の兵力不足に陥り、翌1831年、植民地セネガルや貧しい隣国スペインやイタリアから集めた傭兵による軍隊、つまり有名な「外人部隊」の創設を余儀なくされた。ところがアルジェリアでは1832年からアブド・ル・カーディルに率いられた猛烈な反仏闘争が始まり、その抵抗闘争が一応の収束をみるのはようやく1847年のことだった。

折しもフランス本国では翌1848年にジャコバン暴動による2月革命が起こって第二共和制が成立したが、その臨時政府も植民地政策を強化し、アルジェリアをフランスの不可分の領土と宣言して併合を推し進めようとした。2月革命に伴うフランス本国の政治的混乱は1852年のナポレオン3世による第二帝政の登場によって一定の安定を得たが、アルジェリアではフランスによる一方的な併合宣言に反対して、今度はまだ軍事制圧の完了していなかったベルベル人⁽⁵⁾の住む地方部を中心に、反仏闘争が頻発した。反抗のリーダーだったモクラニーらに率いられた闘争はカビール、オーレス、ホドナ、オランなどの各地で約10年間にわたって展開され、1864年に当面の峠を越えるまでに数多くのベルベル人の闘士たちがフランス軍に捕らえられた。先述の1864年にニューカレドニアに送り込まれた第一陣の流刑者は、このとき捕らえられた人たちだったのである。

その後の数年間は、ナポレオン3世とベルベル部族のリーダーたちのあいだに比較的良好な関係

が築かれて政情は落ち着いていたが、転機が訪れたのはナポレオン3世の没落を招いた普仏戦争である。1870年に始まった普仏戦争の戦況の悪化に伴ってナポレオン3世は退位し、臨時政府が成立した。だがパリでは翌1871年3月に世界初のプロレタリア革命とも呼ばれるパリ・コンミュンが発生し、臨時政府は約5万人の死者を数えたといわれる大弾圧を労働者に加え、多くの市民が逮捕・拘留された。

そして臨時政府が抱えた問題は、こうしたいわばフランス内部の「叛乱者」の処置だけではなかった。前年の1870年10月に臨時政府法相だったユダヤ系のクレミューが発した通称クレミュー法と呼ばれる政令に反発して、アルジェリア全土で猛烈な反仏抗議行動が展開されていたのである。この政令は、約3万5千人といわれるアルジェリアのユダヤ教徒にのみフランス国籍を一括して付与するという内容だったため、ベルベル人・アラブ人を問わず、アルジェリアのイスラム教徒が一斉にこの宗教差別に基づくアルジェリア分割政策に反発し、パリ・コンミュンとほぼ時を同じくして1871年3月から、ハッダードや50年代のベルベル反乱のリーダーだったモクラニーらが猛烈な反仏闘争を繰り広げたのである。しかし同年12月までにモクラニーは戦死し、反乱は鎮圧された。このときの逮捕者には強制労働が懲役刑が科せられ、反乱の主要メンバーはフランス国内に移送されて収監された。

このようにして、フランス臨時政府は国内でパリ・コンミュンを引き起こした大量の逮捕・収監者と、アルジェリアから移送したやはり大量の逮捕・収監者を同時に抱え込むことになり、その処置に苦慮することになったのである。こうした切羽詰まった状況を背景として、臨時政府は1872年にニューカレドニアを正式に犯罪者の流刑地と決定し、翌73年に第三共和制の共和国政府に衣替えしてからは、これら内と外の「叛乱者」たちを続々とニューカレドニアに送り込んだ。1876年にニューカレドニアに到着した72名の「イスラム教徒」流刑者の中には、戦死したモクラニーの弟や抵抗のシンボリック的存在だったハッダードの息子などの重要人物が含まれていた。

(3) アラブ人村「ネサデュー」の創始

しかし、パリ・コンミュンなどによるフランス人受刑者には数年後の1880年にすぐに特赦令が出たにもかかわらず、アルジェリア人受刑者はそのままにされた。やがて彼らは収容所からは解放されたものの、いわば天然の牢獄である島内に、「放し飼い」状態で監視されたまま受刑が継続した。そして1885年に、彼らは冒頭で述べた「ネサデュー村」を創始して集まりはじめ、周辺の荒れ地を開墾して生活するようになった。彼らに特赦が出されたのは、皮肉にもアルジェリアでフランス人を中心としたコロン（入植者）たちによる同化政策が強く推進された1895年まで待たなければならなかった。コロンたちが同化政策にこだわったのは、アルジェリア人をフランス人と見なすことによって、それまで「原住民を保護する」という名目の法律に邪魔されていたアルジェリア人の土地や財産の収奪を、合法的に進めることができるようになるからである。すでに法的にフランス本土の一部となっていたアルジェリアで、こうしてアルジェリア人がたとえ二級市民とはい

え、法的にもフランス人となることによって、ニューカレドニアでもアルジェリア人受刑者たちはフランス人の扱いとなり、その結果特赦の対象となったわけである。なお、アルジェリアからの最後の流刑者がニューカレドニアに到着したのは、特赦の翌年、1896年だった。

特赦が出たからには彼らは故郷アルジェリアに帰還することもできた。聞き取りによれば、実際に帰還の動きは1947年まで続いたという。しかしアルジェリアが過酷な植民地支配に喘いでいる状況では「帰っても良いことはない」という判断が働き、かなりの数の人々がニューカレドニアにそのまま残った。そうした残留者がニューカレドニアのフランス人主導の社会で自由に生きてゆくにはかなりの困難があり、様々な紆余曲折を経たあげく、多くの人々が結局はネサデュー村に身を寄せて暮らすことになったのである⁽⁶⁾。

その後、第一次世界大戦と第二次世界大戦に際して、彼らとその子孫はフランス軍兵士として徴用され、第一次大戦時には父祖の地である北アフリカ戦線に送り込まれるという皮肉な経験を味わった。さらに彼らは、第二次大戦が終結すると、1950年代から60年代初頭にかけて、今度は故国アルジェリアがフランスからの独立をめざして多くの血を流すことになる熾烈な独立戦争の行方を、地球の裏側からフランス人として見守るしかないという複雑な立場に置かれた。ネサデュー村の人々が自分たちの存在を自信をもって世間にアピールするようになるのは、アルジェリアが130年もの長きに及ぶフランス植民地支配からの解放を勝ち取った1962年以後のことだった。本稿があとで問題にするのはこの時期以降の話である。したがってここまでを「前史」と位置づけようと思う。

2. 「前史」のなかで失われたものと残ったもの

(1) 流刑者（第一世代）の時代

アルジェリアからの流刑者の第一陣がヌメアに到着したのが先述のように1864年で、最後の到着が1896年だから、32年間にわたって流刑者がニューカレドニアに送り込まれ続けたことになる。この人たちを「第一世代」と呼ぶことにしよう。その総数は定かではないが、ネサデュー村が属するブーライユ市のモスクの事務所に現在記録されている流刑者リストには、計235名の名がみえる。ただしこれはブーライユ市で亡くなった人々だけなので、特赦後にフランス本国や故国アルジェリアなどに渡った人や消息不明者も含めると、おそらく第一世代はその数倍に及ぶだろうことが推測できる。

ではこれらの流刑者はいったいどんな人々だったのだろうか。リストには名前他に生没年と出身地が記録されている。それによると、何人かは出身地が現在の国名にしたがって「モロッコ」と「チュニジア」と表記されているが、残りの大多数については国名なしで単に都市名だけが書かれている。それらはすべて「アルジェリア」の都市である。したがって流刑者の出身地はこれら現在のマグリブ三国ということになる。もちろん流刑当時、つまり19世紀後半には、こうした国分けはなく、モロッコ東部からアルジェリア、さらにチュニジアにかけては連続した土地であったわけ

だから、この分類は現在の国家体制を基準にしたものである。ちなみに流刑者たちの墓に発して現在も運営されているプーライユ市の共同墓地の入り口にも、「アルジェリア人、モロッコ人、チュニジア人流刑者の記憶とともに」と明記された真新しい銘板が掲げられている。なお同じ銘板には「アラブ人、カビール人」という表記もあるが、この区別はリストには反映されていない。この点は本稿の主題に関係する事柄なので、のちほど再び触れる。

さて流刑者リストに戻ろう。記載された全235名のうち37名は出身地不明で、残る198名の内訳を勘定すると、アルジェリアが182名、モロッコが9名、チュニジアが7名となる。つまりほとんどがアルジェリア出身である。そのアルジェリアを詳しく見てみると、トレムセン、オラン、モスタガネム、マスカラ、スイディ・ベルアッパースといったモロッコに近い西部の諸都市が多く、次いでコンスタンティーヌ、バトナ、テベサ、ゲルマなど、チュニジアに近い東部がきて、中部のブリダ、アルジェ、ティジウズ、ブ・サアダなどがそれに続く。つまり西から東まで、人口の多い北部地中海沿いの海岸や山地からまんべんなく集まっていて、あとで触れる中部のカビール地方出身者はさほど多くなく、むしろ抗仏運動の拠点となったいわゆる「ベルベル人地域」の全域をくまなく網羅しているといつてよいだろう。

一方、生まれた年の記載されている人々200名の内訳を数えてみると、生年は以下ようになる。1810年代2名、20年代2名、30年代27名、40年代28名、50年代50名、60年代60名、70年代30名、80年代1名。つまり1850年代と60年代生まれが流刑者の中心となっていたことがわかる。彼らがニューカレドニアに送られた日付はリストには記載されていないので詳細はわからないが、1870年代から80年代にかけての時期にもっとも移送者数が多かったと推測できるので、おそらく流刑者の多くは移送されたとき20歳代から30歳代であっただろう。そして彼らの没年をみると、最初の物故者が1872年であり、最後は1968年になっているので、早逝した人と長生きした人の幅はなんと約90年もある。ちなみに最高齢者は106歳で、1958年に亡くなったと記載されている。また流刑者のうち特赦前、つまり1895年以前に囚人の身のまま亡くなった人たちの没年齢は、当然のことではあるが非常に若く、最年少が28歳で、60歳を超える3名を除くと、残り30名の平均没年齢は44歳である。なお、こうした特赦前に亡くなった人のアラブ系流刑者全体に占める比率は17%になっている。最も困難な時期を生きて早逝した彼らの名誉はいまだに回復されていない。

さて『プーライユ市史』⁽⁷⁾を見ると、ネサデュー村が1885年に創始されたあと、村の生活が軌道に乗るのは19世紀末から20世紀初めの頃だったようである。創始当初の10年間は村民はまだ受刑者の身分だったため移動の自由はほとんどなく、土地や動産の取得も厳しく制限されていて、村の生活は非常に厳しいものだった。特赦令の出た1895年以降ようやく自分の開墾した土地を自分で所有できるようになり、世帯も構えて、村としての体裁が整ってきたのが世紀の変わり目あたりということになる。そして第二世代が生まれてくるのもその時期であった。

(2) 第二世代以降

第二世代の誕生に関わる重要なことは、流刑者である第一世代が男ばかりだったという事実である。彼らは、妻帯者の場合妻子を呼び寄せることはできず、また独身者にはアルジェリア女性と結婚する機会はなかった。そこで当然ニューカレドニア現地で知り合うことのできた女性と結婚することになった。

調査で得られた聞き取り情報によれば、まずいわゆる先住民であるカナック（Kanak）と呼ばれる地元のメラネシア人との結婚があった。フランス軍がブーライユ市周辺の「平定作戦」を実施したのが1880年代初頭のことで、ネサデュー村の創始もほぼこの平定作戦と同時進行だったと思われる。フランスは平定（つまり先住民カナックの追い出し）をした土地を受刑者たちに開墾させた。その開墾者である「アラブ人」がカナックの女性と結婚したことは想像に難くない。

だがむしろそれよりも可能性が高かったのはヨーロッパ人女性との結婚である。何らかの理由でやはり流刑処置を蒙ったヨーロッパ人女性たちは、当初女子刑務所に服役したが、やがて釈放されて、同じ境遇にあった流刑者たちと結婚した。「アラブ人」男性も当然その対象になった。現在ネサデュー村に住むある男性の祖母（おそらく第一世代）はイタリア人で、そうした境遇にあったようだ。そのほか、数は少ないが、フランス本国からの自由移民や行政官・憲兵などの家族と結婚する場合もあったらしい。

さらにこの時期に進行したもうひとつの重要な事項がある。1864年にニッケル鉱山が発見され、その後約20年ほどのあいだにニューカレドニアの鉱業はアジア各地から多くの労働力を必要とするほどに成長したのである⁽⁸⁾。そのとき鉱山労働や道路建設に集まってきたのは中国系を含むインドネシアやベトナムなどの人々が主流だったが、なかには日本人も含まれていた。成安造形大学の津田睦美氏によれば、1892年（明治25年）に600名の日本人男性が移民会社の斡旋で5年間の契約でニッケル鉱山で働くために仏領ニューカレドニアに旅立ち、その後その数は1919年までに5,575名にのぼり、その後帰国せずに残った日本人は現地女性と結婚し、子孫を残したという⁽⁹⁾。ちなみにその頃の様子を写した写真が首都ヌメアのヌメア博物館に展示されている。いずれにせよ、こうしたアジア系の人々およびその子孫との結婚が、ネサデュー村の第一世代ばかりではなく、2世、3世の時代には決して珍しいことではなくなった。現在3世にあたるネサデュー村のある男性の奥さんはベトナム人であり、また別の男性の奥さんは日本人の孫だという。

(3) 失われたもの

カナック女性であれヨーロッパ女性であれ、あるいはアジア女性であれ、ネサデュー村の第一世代の「アラブ人」がこうした人々と結婚したことによって生じた最大の問題は、言葉の喪失であった。アルジェリア出身の流刑者たちが話した言葉はそれぞれの出身地のベルベル語であったと思われるが、ベルベル語は広大なアルジェリア域内で地方差が大きく、また流刑者のなかにはベルベル語を話さないいわゆるアラブ人も含まれていたことを考慮すると、おそらく彼らのあいだの共通語

はアルジェリア方言（より広くはマグレブ方言）のアラビア語であっただろうと容易に推測できる。そのアラビア語が結婚によって家庭内で通じなくなり、代わってフランス語が用いられるようになった。また家庭の外でもおそらくアラビア語の通用範囲はそう広くなかったであろう。というのも、ネサデュー村の人々は生活圏が仲間内で閉じていたわけではなく、周辺の人々との町での日常の交渉や行政手続きなどに際しては当然フランス語を使わざるを得なかつただろうし、また首都ヌメアに出てフランス語の世界で働く人々も多かった。ちなみにヌメアでは「アラブ人」は馬や、のちには自動車を使つての運送業で身を立っていたようである。1903年に行われた「ニューカレドニア領有50周年記念式」の写真には、馬に乗ってアラブ服に身を包んだ「アラブ人」の一団の威風堂々とした姿が映っている。

ともあれ、第一世代の父親同士がアラビア語で話すのを聞いて育つたことはたしかであっても、第二世代にとっては、おそらくアラビア語が第二言語に後退したことは否めないだろう。現在ネサデュー村の最年長者といわれるアフマド・ベルアムーリーさん（1924年生まれ）と話す機会があったが、彼は第一世代の人々が話していたアルジェリア東部のチュニジアに近い地方のアラビア語方言をかすかに覚えていた。しかし第一世代が老齢化して第一線を退いた1920年代以降、アラビア語は急速に失われていったようだ。

家庭内で、特に母親がアラビア語を解さないということは、言語の継承にとっては致命的であっただろう。言葉によって担われる多くの文化要素が母親を通じて伝達されるということを考えたとき、母親がアラビア語を解さないことの影響は多方面に及んだはずである。たとえば食習慣や衣服などはその代表例であり、また儀礼や祭り、教育といった社会制度も維持するのは当然困難になる。アルジェリアの文化を身につけていた第一世代と違って、ニューカレドニアで生まれた第二世代以降は、同じ村の中でそれぞれの母親がアジア、メラネシア、ヨーロッパなど世界各地の出身者から構成されていれば、そこに共通の儀礼や教育を求めるのは所詮無理であり、いわゆるハイブリッドな文化がフランス語をベースにして展開されることになる。

このほか、アラビア語の喪失に伴って失われた重要なものにコーランがある。コーランはいうまでもなくアラビア語で朗唱することが非アラビア語話者にとってさえ基本的な要件であるが、アラビア語の読み書きのできる者はおるか、朗唱や礼拝の仕方を心得ている者も激減するなかで、彼らがつた道はフランス語訳のコーランを詠むということであつたという。アラビア語以外の言葉に翻訳されたコーランはすでにコーランではなく解釈書に過ぎない、という現在の常識からすれば考えられないことではあるが、彼らはそうせざるを得なかつた。そしてムスリム（イスラム教徒）をやめるという選択肢は彼らにはなかつた。ムスリム（男）が非ムスリム（女）と結婚するときには女は改宗の必要はないが、生まれてくる子供たちはムスリムになることが当然視されるからである。

ムスリムでありながらフランス語訳のコーランを詠むという特殊な状況と並んで、もうひとつ特殊な喪失状況が生じた。「名前」の問題である。アルジェリアに限らず、アラブ世界では名前の構成としてはまず個人名があり、そのあとに父の名前、次いで祖父の名前が接続され、場合によって

最後に姓に相当する名前（ニスバという）が加えられる。アルジェリアからやってきた第一世代の人々の名前は、流刑者リストで見ると、たしかに全員この構成をもっていた。しかしニューカレドニアで出生した第二世代以降については、個人名にフランス風の名前がフランス当局から要求されたのである。墓地で確認した墓碑銘から例を挙げると、ルシアン、フェルナンド、アレクサンドル、アルベールといった名前が付けられており、また今回の調査で知り合った人々にもポール、ロベール、ジャンピエールといった人々がいた。自分の子供たちにムスリムとしてはおなじみのムハンマド、アフマド、ハサン、アリーといったポピュラーな名前を付ける権利さえ奪われたという喪失感、おそらく第一世代の人々には屈辱感を伴って共有されたことだろう。なお墓地に関しては、ムスリム専用の墓地が認められてこなかったことも附記しておかねばなるまい。ニューカレドニアの最高行政責任者である高等弁務官の政令によって、ムスリム専用墓地は今日に至るまで認可されていないのである。

（４）残ったもの

このように、通常ならば文化を構成するはずのさまざまな基本要素が失われたなかで、残ったものがいくつかある。そのひとつが遺体の埋葬方法である。遺体を洗浄したあと、継ぎ目のない一枚の白布でおおい、顔をメッカの方角に向けて埋葬するというムスリムの埋葬方法は継承された。そして埋葬後にその場で、フランス語版とはいえ、コーランの章句を全員で朗唱するという作法も維持されたという。このように、死と死後の世界に関する認識はしっかりと保持されたようで、それが内容はともあれ、ムスリムとしての自覚を継続させるのに役立ったことはたしかである。また先述のように個人の名前からムスリムとしての特徴は奪われたものの、姓に残されたアラビア語名は自分たちが「アラブ」の末裔であるという意識の保持に大いに貢献したこともたしかである。

結局、多くの文化要素を喪失したにもかかわらず、墓地が自分たちのムスリムとしての尊厳を、また姓が自分たちのアルジェリア人の末裔としての意識をかるうじて守ってくれたのである。

３．復活を目指すもの

（１）組織の設立

故国アルジェリアがフランスからの独立を果たした1962年から5年後の1967年、ネサデュー村の属するブーライユ市に「アラブ協会」が設立された。おそらくこれが、ニューカレドニアで流刑者の子孫が声を上げた最初の機会だったろう。そして自分たちを「アラブ」と公式に主張した最初の機会でもあった。故国アルジェリアの独立がその大きな契機となったことは疑えない。

この声はやがて首都ヌメアに拡大し、「アラブ」はより多くのムスリム人口を擁するインドネシア系の人々などを巻き込んで、1975年にヌメアに「ニューカレドニア・ムスリム協会」を設立するに至った。この協会はフィジー人の寄付によってヌメア市内に土地を購入し、その後、イスラム会議機構の下部組織であり、サウジアラビアのジェッダに本部を置く国際的金融機関「イスラム開

発銀行」の援助と、サウジアラビア国王の個人的寄付を獲得して、1989年に同じ土地に「ヌメア・イスラム・センター」の建設を完了した。このセンターは図書館や集会所や事務所等を附置した事実上のモスクであるが、東京外国語大学の小田淳一氏によれば、フランスでは海外からの援助で「モスク」等の明示的な名称を持つ宗教施設を建てることは法律で禁じられているため、当地でのモスクの正式名称は「イスラーム・センター」とせざるを得なかった⁽¹⁰⁾。いずれにせよ、この段階でネサデューの人々は単に「アラブ」というだけでなく、「ムスリム」というより広範な人間のネットワークに身を投じたのである。

さらに約10年後の1998年、ネサデュー村の人々は同じ「イスラム開発銀行」の資金によって、地元ブライユ市に「ネサデュー・イスラム・センター」を完成させた。本稿で「モスク」と呼んできたものである。そして同じ資金によって先祖の墓地を改修し、そこに葬儀場も附置した。このようにして、ニューカレドニアのアラブ人村はその存在を外の世界に知らしめるための物理的・社会的環境を整えたのである。

なおここで若干の統計的数字を押さえておきたい。「ヌメア・イスラム・センター」事務局長のレイモン・ロフミンさんによれば、ニューカレドニアの総人口約25万人のうちムスリム人口は約5,000人で、そのうちインドネシア(ジャワ)系が約8割を占め、次いで「マグリブ」、さらに「アフリカ」「ユーゴスラビア」「フランス」などとなっているという。とすれば「マグリブ」すなわち「アラブ」は1,000人以下になるはずだが、ブライユ市長とのインタビューによれば、ブライユ市の人口約6,000人のうち「アルジェリア人」は2,000人で、「メラネシア人」が1,600人、その他「中国人、フランス人」などが2,400人だという。「アラブ」人口の数字が合わない。しかし宗教別、民族別のセンサスは行われていないとのことなので、数字は概数にとらえるしかあるまい。ただし確かなことは、ネサデュー村の人々がニューカレドニアのムスリム人口のなかではマイノリティーであり、さらにムスリム人口そのものがニューカレドニアのなかではごく少数だということである。

こうした二重のマイノリティーの立場を自覚した上で、ネサデュー村の人々は失われた文化の復活を目指している。

(2) なにを復活させるか

復活の柱となるのはアラビア語である。それも父祖の話したアルジェリア方言ではなく、世界に通ずるアラビア語つまりフスハーと呼ばれる正則アラビア語である。その最大の眼目はいうまでもなくコーランをはじめとする宗教テキストの読み書きだが、それとともにアラビア語は子弟の教育の有利な手段でもある。村の有力者であるブフネーシュ・アブデルカーディルさんは自らメッカ巡礼を果たして、アルジェリアなどフランス語の通ずる世界とは縁遠い東方アラブ世界に触れたのみならず、息子はフランス本土で勉強したあとサウジアラビアに渡って、なおも勉強中だという。ややもすればフランス語の世界に収まりがちな人間関係をその外に広げるのに、正則アラビア語は

じつに有効な手段となるのを彼らは知っている。

ヌメアやブーライコのイスラム・センターを建設する際の資金を提供してくれたイスラム開発銀行などとの交渉もフランス語で可能だとはいうものの、やはりアラビア語が大きなメリットとなるのは間違いない。またアラビア語を通じてサウジアラビアのみならずさまざまなアラブ諸国への留学のチャンスが広がり、それはまたビジネスチャンスの拡大にもつながる。当然のことながらそれはまた故国アルジェリアとの接触に際しても決してマイナスにはならない。

そうしたアラビア語教育をイスラム教育と合わせて地元で行うために、首都のヌメア・イスラム・センターでは定期的なアラビア語教室を催し、モロッコやサウジアラビアから教師を派遣してもらっている。そしてヌメアではモスクのイマーム（礼拝の導師）をサウジアラビアから招聘し、またネサデュー村のモスクにはモロッコの宗教的中心都市フェズから、フィラーリーという由緒正しい家系の若いフキー（先生）が派遣され、先述の村の有力者アブデルカーディルさんの家に寄宿していた。フィラーリー家はモロッコの現王朝アラウィー朝を草創期から支えてきた政治的に有力なベルベル系の家系であるから、その人的ネットワークは当然王室にまで伸びていることだろう。

（3）復活と創造

さて、ネサデュー村の人々が復活を目指すのは、これだけではない。祭りの復活を通じて「アラブ」意識の強化を図っている。たとえばフランス語表現で「ファンタジア」と称する祭りがある。モロッコやアルジェリアではすでに一般化している祭りで、男たちが数頭の馬に乗って横一線になって走り、馬を停止させる瞬間にライフルを一斉に空に向かって撃つという単純な行為を繰り返すものである。この祭りが2000年代に入ってからネサデュー村で行われるようになったという。その模様を記録した写真を見ると、興味深いのはそのいでたちである。白いアラブ服にやはり白いターバンを巻いているのだが、ある人はアルジェリア南部からニジェルにかけて暮らすトゥアレグ族の人々の着用する一枚布を口まで巻き付けるスタイルのターバン姿であるのにたいして、別の人はサウジアラビアのベドウィンが使うゴトラというターバンとイカールというヘッド・リングを着用し、また別の人はモロッコ中部で用いられるターバンを着用するというように、要するにどこのものともわからない寄せ集めファッションなのだが、一見するといかにもアラブ風に見える。彼らに民族衣装に関する詳しい知識がないといえばそれまでだが、重要なのはむしろそのおおらかさであろう。すでに失われて久しい民俗知識の詳細を復元する義務は彼らにはなく、大事なのは「アラブ人」であることを確認できる道具立てなのである。

さらにいえば、そもそもこの祭りはモロッコで20世紀前半に普及したものであり、少なくともニューカレドニアに第一世代が送り込まれた19世紀半ばには、アルジェリアにはこの祭りはなかったか、あったとしてもきわめて限られた行事だったはずである。つまりこの祭りは正確に言えば「復活」ではなく「創造」である。ホブズボウムとレンジャーらが『創られた伝統』⁽¹¹⁾で明らかにしたように、伝統の起点は過去にではなく現在にある。ネサデュー村の「ファンタジア」が伝統

の復活ではなく伝統の創造だとすれば、この祭りの北アフリカにおける元々の様子や衣装の詳細などは二次的なことであり、重要なのは「アラブ的であること」という現在の要求のほうだといえる。詳細にこだわらないおらかさというのは、そうした目的から引き出される当然の帰結なのである。

とはいえ、この祭りがまったくの創造とも言い切れない面がある。ファンタジアはアルジェリアでもモロッコでも、イスラム聖者（フランス語表現で「マラブー」）にちなんで行われる「ムーセム」という祭りの一部として実施されるイベントであり、そこには何らかの形で聖者が関わっている。ネサデュー村はというと、共同墓地の一隅にたしかに聖者の墓が3基残っていて、名前も記憶されている。そのうちの2名（アブー・アブドゥ、ナスィール・ハーミド）は、いつの頃かわからないが、どこから漂着したイエメン人だということで、墓はなかば打ち棄てられた状態になっているが、それに対して残る一人（ムーレイ・ブン・バシル）はアルジェリア人で、ニューカレドニアの最初のマラブーだということになっている。墓はコンクリートで新しく修築され、高さ1メートルほどの真っ白い周壁も施され、棺の上には賽銭も数多く供えられている。

正体不明の聖者がイエメン人だという言い方は北アフリカの各地にも残っているので、おそらくそうした言い伝えの伝統が第一世代の流刑者によってニューカレドニアに持ち込まれ、それが現代まで継承されてきた可能性は大いにある。この部分はおそらく「創られた伝統」とは考えにくい。そしてそれに比べれば身元のたしかなく（といってもムーレイ・ブン・バシルが流刑者の一人だったかどうかさえも不確かではあるが）聖者を鮮明に意識し、それをファンタジアと結びつけるという現象は第一世代にはなかったもので、そういう意味で、ファンタジアは第一世代に根を持つ聖者信仰の発想と、最近の認識を取り入れて伝統を創ろうとする営為の接合地点に生まれてきたといえるだろう。

ファンタジアと同じような現象は、子供の育て方にも現れている。先述のブフネーシュ・アブデルカーディルさんは娘さんに、アラブ人女性の自覚を持たせるためにベリーダンスを習わせているという。ベリーダンスもまた現在の形になったのは比較的新しく、国立民族学博物館の西尾哲夫氏によれば、その源流は中世にさかのぼるにしても、欧米はじめ世界各地にこれがアラブ的なものとして広まっていったのは19世紀末から20世紀に入ってからのもので、欧米で創られたアラブ・イメージが本家のアラブ世界に輸入されたものと考えられる⁽¹²⁾。少なくとも第一世代の流刑者の時代にベリーダンスが「アラブ」を象徴する道具立てでなかったことはたしかである。その意味でベリーダンスもまたファンタジアと同じように、現在を起点とする伝統の創造といえるだろう。娘さんのダンスの先生は首都ヌメアに住むモロッコ人女性だというから、たかが子供の習い事といえども、そのことによって新たに人間関係がアラブ（マグリブ）世界に広がっていることは注目してよい。

なおブフネーシュさんは、奥さんの祖父が日本人だったということで、奥さんは日本の踊りを習っているという。こうした「なにがなんでもアラブ」という方向に意識が収斂してゆかない自由さが、ネサデュー村の「アラブ」という表象の開放性の一端を示している。

4. 政治環境と民族表象

(1) 国際先住民年と文化多様性条約

「ニューカレドニアのアラブ人村」の存在が知られるようになったのには、現在ネサデュー村が属するプーライユ市の市長を務めるタイプ・アイファさんの貢献が大きい。彼は労働運動から身を起し、1960年代から先に述べたいくつかの組織の設立にも尽力した。彼のエネルギッシュな活動なくしてはおそらく村の存在が知られることはなかっただろう。しかしそれを可能にした国際的な政治環境も念頭におく必要がある。

世界各地で、とりわけ欧米人（白人）が政治・経済的に優越している場所で、マイノリティの人々の声が正当に取り上げられるようになったのは、冷戦が終わった1990年代以降である。その嚆矢が国連の「国際先住民年」（1993年）とそれに続く「世界の先住民の国際十年」（1994～2004年）である。ニューカレドニアで人口的にはマジョリティでありながら政治的・社会的・経済的にはマイノリティの立場に置かれてきた先住民であるカナック（Kanak）と呼ばれるメラネシアの人々が自分たちの声を発する上で、こうした国連決議はたしかに大きな推進力になった。実際、ニューカレドニアの民族独立運動の指導者ジャン＝マリー・チバウを記念して「チバウ文化センター」と名付けられた博物館が、国際十年のさなかの1998年に首都ヌメアに完成している。

ところがニューカレドニアの「アラブ人」は決して先住民ではない。19世紀にフランス人とともにやってきたよそ者であることは誰の目にも明らかである。それにもかかわらず、その「アラブ人」のストーリーが綴られた『太平洋のカピール人（Kabyle en Pacifique）』というDVDビデオをチバウ文化センターで見ることができる。これは共にフランス人に苦しめられた被害者同士の連帯意識というよりも、おそらく「先住民の権利」とともに称揚された「文化的多様性」のユネスコ宣言（2001年）と同条約の締結（2005年）が両者の連帯に正当性を与えたものと思われる。文化多様性宣言の実現を強力に主導したのが他ならぬフランス政府だったことは、少なくともカナックと「アラブ人」の連帯にとってはプラスだった。

(2) 屈折した事情

しかしニューカレドニアの「アラブ人」を取り巻く政治環境はそう単純なものではなかった。1990年代にフランス政府が推進した「文化的多様性」のイデオロギーは、故国アルジェリアに複雑で屈折した影響を与えたからである。

アルジェリアでは独立（1962年）以来、植民地時代にフランスによってまずユダヤ教徒が切り分けられ、次いで「ベルベル」が「アラブ」から切り分けられ、そうやって国が分断されてしまったとの思いが強く、それが折からの中東諸国でのアラブ・ナショナリズムの隆盛と呼応して、「アラブ化」政策が国家再統一のスローガンのもとに、特に言語政策の柱として推し進められた⁽¹³⁾。政府による「アラビア語化」政策である。植民地時代に徹底的に奪われてしまったアラビア語を取り戻そうという意味合いもあった。しかし植民地時代から独立後にかけて大量の移民をフランスへ

輩出した中部カビール地方の人々は「アラビア語化」にとまどい、1970年代から80年代にかけて何度か流血の抗議活動を展開した。自分たちの言語、すなわち「ベルベル語」の一方言とされてきたカビール語の保護を訴えたのである。そしてその運動はやがて「ベルベル(=野蛮人)」という屈辱的かつ植民地主義的呼称の廃棄を求め、それに代わって「アマズィグ(Amazigh)」という別の呼称の使用を主張するようになる。そのとき「アマズィグ」はすでに「カビール」という狭い範囲を超えて、皮肉にも従来の「ベルベル」に相当する漠然とした広範囲の人々を指すように変質していた。カビールの人々はこの運動を純粋に文化運動だと訴えたが、政府からは国を分断する分離独立運動ととらえられて弾圧されることもあった⁽¹⁴⁾。世界各地の先住民運動が抱えるのと同じジレンマが生じたのである。ただしカビールの場合、そうした異議申し立ての相手が欧米人(白人)ではなく、ともに植民地主義に苦しんだアラブ人であるという点が大いに事情を複雑にした。そこに登場してきたのがフランス政府主導の「文化多様性」イデオロギーだったのである。

このイデオロギーがカビールの人々を勇気づける側面があったのは否定できないだろう。しかし全面的にそのイデオロギーに同調することは、アルジェリアに介入しようとするフランス政府に荷担すること、フランスへの同調者、つまり裏切り者とも受け取られかねない危険性も帯びていたのである。しかも彼らの主張をアルジェリア国内だけでなく、国外の同胞、あるいはいわゆる国際世論に訴えてゆくためには、フランス経由のフランス語に頼った情報発信は戦略的にも必要不可欠だった。これは大きな矛盾である。それに加え、アマズィグ運動の一部はやがて世界の先住民運動の政治ネットワークと連携してゆくようになる。それはとりもなおさずアルジェリア国内での孤立につながる可能性があった。カビールの人々が抱えたジレンマは、おそらくこのように二重にも三重にも屈折したものだだろう。そしてアルジェリアは1990年代の10年に及ぶ内戦に突入することになる。

ニューカレドニアの「アラブ人」はアルジェリア独立戦争に続いて、またしても地球の裏側から故国の政治情勢を見守ることになった。熾烈な内戦が一段落して落ち着きを取り戻したのが2000年代であり、その頃にはすでに文化的多様性も先住民の権利も国際政治の場では定着しつつあり、アルジェリア政府はカビールの人々の訴えた「アマズィグ」という新たな呼称を正式に採用するに至った。

先述のタイプ・アーイファ市長が父祖の出身地、アルジェリアのカビール地方、セティフ県ユルマ市を訪問することができたのは、こうしてようやく2005年になってのことであった。そのときユルマ市から発行してもらった市民権保証書が、ネサデュー村のイスラム・センター事務所に飾られている。そしてアルジェリア国旗もそこに誇らしく掲げられている。しかし、同市長やネサデュー村の人々が自分たちを「ベルベル人」とも「アマズィグ人」とも表現しないのは、これらの語が今述べたような複雑で微妙な政治的含意を持つことに配慮しての判断であるように思う。

(3) 民族表象

さてここで「アラブ人」というふうに本稿で繰り返し表記してきた目障りな括弧の意味を検討しなければならない。ネサデュー村の人々はアラブ人なのだろうか。ふつう民族としてアラブを定義する場合、アラビア語を母語とするか、あるいは出自をアラビア半島にさかのぼるか、いずれかが基準とされてきた。本稿冒頭で述べた「民族」を客観的に定義する立場である。この視点からすれば、ネサデュー村の人々がいずれの基準も満たさないことはすでに見たとおりである。彼らの母語はフランス語であり、父方の系譜をたどってもほとんどの人が「ベルベル」であって、アラビア半島とは縁がない。ましてや母方の出自となると世界各地に拡散する。では主観主義の立場に立って「彼ら自身がアラブだと思っているから」ですむだろうか。たしかに「アラブ協会」を作り、「アラブ的な文化」をめざし、「アラブの村」を自称している。しかしそれらの営為は、自分たちがアラブかどうか疑わしいから、あるいは周囲から疑わしいと見られるからこそ意識的に行う努力であろう。すでに述べたように、アラブ的な要素は実質的にほとんど喪失しているのである。そうすると次には「名乗り」と「名付け」のプロセスが残ることになる。自ら「アラブ人」を名乗り、他からも「アラブ人」と呼ばれる。この点については、実際ににその通りの幸福な状況が生まれているので、めでたしめでたしである。だがそれで終わりでのよいのだろうか。「自分たちはカナックでもなくインドネシア人でもなくフランス人でもなくアラブ人なのだ」という了解を得ることが着地点になり得るのだろうか。それならば私が「アラブ人」に括弧をつける必要はない。答えはおそらくもっと別のところにある。

ネサデュー村の人々はフランス人であり、同時にカナックでもあり、インドネシア人でもあり、イタリア人でもあり、日本人でもあり、そしてアラブ人なのだ。つまり同じ「名乗り」であっても、他の属性を排除して成り立つような閉鎖的な民族性を彼らが求めているわけではない。そもそも民族としての「アラブ」という概念自体が、19世紀後半に中東において「トルコ人でもなくイラン人でもない残りの人々」といういわば残余カテゴリーとして西欧の政治的圧力のもとに生まれたこと、およびその民族創成プロセスがレバノンやシリアの「キリスト教徒アラブ人」に多くを負っていることを思い返すとき、その用法は最初から当然に融通無碍なのである。また狭義のアラブという語がアラビア半島の部族民（ベドウィン）のうち、定住せずに砂漠で遊牧生活を送る人々のみを指すことを考えれば、今日民族としての「アラブ」といわれる人々のほとんどはアラブではないのである。したがって「アラブ民族」のなかに通常のナショナリズムに見られるような民族概念の具体的な中身を詮索してもほとんど意味がない。

共同墓地の入り口に掲げられた銘板に戻ろう。そこには埋葬者の属性としてまず最初の行に「アラブ人」と「カビール人」が並列に記されている。「カビール人」の方は、先に述べた政治的に微妙な表現である「ベルベル人」および「アマズィグ人」を避けて、それらに代わる表現として使われていることは容易に察しがつく。なぜならフランス本国で「カビール」といえば、それはアルジェリアのベルベル人のことを指すのは常識だからである。当然そこにはカビール語以外のベルベル

語（アマズィグ語）を話した人々も含まれるはずである。一方「アラブ人」の方はベルベル語ではなくアラビア語を話した人々である。この行の記述の発想に従えば、たとえば市長のアーイファさんはカビール人であってアラブ人ではない。次の一行に移ると、そこには「アルジェリア人」「モロッコ人」「チュニジア人」という語が並列に記されている。これは現在の国名によって出身地を区分したもので、いわば価値中立的かつ具体的なイメージを保証する表現である。アーイファさんは問題なくアルジェリア人である。ではカビール人でありアルジェリア人であるアーイファさんがなぜ「アラブ人」を名乗ることができるのだろうか。「アラブ人」という語にはカビール人に対するアラブ人という意味合いを超えて、ここに記されているすべてのカテゴリーの人々を総合する機能が備わっているのである。意味内容が空疎であるが故に、かえってそうした総合機能を発揮することができる。そしてこの柔軟な総合機能があるからこそ、母方がカナックであろうとベトナム人であろうと日本人であろうと、そうした人々を「アラブ人」から排除することがないのである。

「アラブ人」という言葉は、また別の方向性も持っている。「ムスリム」（イスラム教徒）という語とのきわめて緊密な概念連鎖を生み出すのである。アラブ人がすべてムスリムでないのはシリアやレバノン、エジプトなどを見れば一目瞭然で、キリスト教徒のアラブ人は大勢いる。一方ムスリムがすべてアラブ人でないのもこれまた自明である。ムスリム人口としては中国やインド、インドネシアなどの方がいわゆるアラブ地域よりもはるかに多いのだから。こうした事実にもかかわらず、「アラブ」と「ムスリム」という二つの語は密接なイメージ連関を備えている。ニューカレドニアで、まず「アラブ協会」が設立され、それがもとになって「イスラム協会」ができあがった事実はその証左である。

そして重要なのは、「ムスリム」という語もまた「アラブ」という語と同じように、あるいはそれ以上に融通無碍な性質を持っていることである。ネサデュー村の人々は礼拝をアラビア語で行えず、また礼拝の仕方詳しくは知らず、コーランもフランス語版に頼る、そうした人たちが「ムスリム」を名乗っても何の問題もないし、咎め立てする人もいない。「イスラム」を一手に管理したりその正統性を独占したりする中央集権的な権力が存在しなかったという世界の長い歴史が「ムスリム」という語の柔軟性を生み出してきたのであり、そのことはニューカレドニアにおいても当てはまるのである。

ではこうした「ムスリム」や「アラブ」といった概念の融通無碍な性質が、なぜ当の人々の篤い信仰心や先祖への敬意を減退させることにつながらないのだろうか。それどころか「アラブ」であり「ムスリム」であることに誇りと自信を持つことさえできるようになったのはなぜだろうか。

5. 開かれた「民族」

上記の答えは、「アラブ」や「ムスリム」を名乗ることによってなにがもたらされたのかに思いを馳せれば、自ずからはっきりするであろう。まず指摘できるのは、人間関係と付き合いの範囲が格段に拡大したことである。なにもしなかったらおそらくニューカレドニアの片田舎で流刑者つま

り犯罪者の子孫としてひっそり暮らしていただろう人々が、首都ヌメアはもちろんのこと、フランス本国や故国アルジェリア、さらにサウジアラビア、モロッコといったさまざまな地域の人々とのつながりを得ることができるようになり、さらにそうして拡大した世界大の社会関係を背景に、自分たちの「被害者」としての立場の正当性を、胸を張って主張できるようになった。それだけではなく、自分たちが孤立したマイノリティどころか、世界に広がるじつに多くの人々のネットワークの一部として、むしろマジョリティに連なることを実感できるようになった。これが「アラブ」であり「ムスリム」であろうとしたことによってもたらされた結果である。

そうした人のつながり方の具体例を考えてみよう。たとえばヌメアのイスラム協会の会長は現在インドのマラバル地方出身者が務めていて、半年前にメッカ巡礼に旅立ったあと故郷のインドに逗留中だったが、彼以外にもポンディシェリなどインドの旧フランス語圏からはかなり多くの人々がニューカレドニアに来ている。ネサデュー村の人々はイスラム協会を通じて、つまりムスリムであることによってインドにまで人間関係のネットワークを広げることが可能になっているのである。あるいはまた、イスラム協会が手がけるハラール食品（イスラム法に則って処理された食品で、肉などがその代表）の輸入を通じて、ハラールの認定を行っているニュージーランドとのつながりが生じている。地理的に近接しているとはいえ、フランス語の世界から英語の世界へとつながりを伸ばした意味は大きい。

さらに興味深いのは、ヌメアのモスク（イスラム協会）が一種のサロンの役割を果たし、そこに出入りするさまざまな人々のあいだに新たなつながりを提供していることである。モスク自体は世界の他の都市のものに比べれば小規模で、金曜日の集団礼拝に集まるのも30人程度だそうだが、そこには地元ニューカレドニアの人々ばかりではなく、ジャワなどインドネシアからの出稼ぎ労働者や世界各地からの旅行者、中・長期滞在者なども集まってくる。私がたまたまモスクで知り合ったのは30歳代のモロッコ人男性で、7年前に仕事でヌメアにやってきて、妻と娘との3人暮らしをしているそうで、あと1年もしたらモロッコかパリに戻るとのことだった。彼の生まれ故郷であるモロッコのメクネス市は私も何度も足を運んだことのある馴染みの町で、知人が何人か住んでいる。そんな話で意気投合したせいか、彼が、ヌメアでベリーダンスを教えているモロッコ人女性を知っているので紹介してくれるという。ヌメアでベリーダンスを踊れる女性は二人しかいないとのことなので、そうするとネサデュー村のアブデルカーデルさんの娘さんがベリーダンスを習っているのはその女性である可能性が極めて高い。もちろんこのモロッコ人男性はネサデュー村とは無関係である。こうやって、モスクでの偶然の出会いが私の既知の人間関係と結びつき、人間関係の範囲はどんどん膨らみ、重層化してゆく。

個人的なエピソードをもう一つ付け加えると、ヌメアのイスラム協会の事務局長を務める前出のインドネシア系のロフミンさんは、義妹がかつてジャワからやってきた鉱山労働者の娘で、彼女の甥にヌメアで旅行会社を営む男性がいて、その人と結婚している東京出身の日本人女性を通じて、我々はネサデュー村への足となった自動車を調達した。またロフミンさんの奥さんは、かつてやは

り鉱山労働者としてやってきた日本人の孫だということである。このように、その気にさえなれば、私はモスクでの出会いをきっかけとして、インドネシアからさらに日本へまでもその人間関係をつなげてゆくことができる。同時にそれをネサデュー村へとつなげることもたやすい。あるいはもうすでにそのような人間関係はできあがっているのかもしれない。

このような環境の中にいれば、偶然はもはや特別なことや驚くようなことではない。当たり前なのである。偶然を既知へと平然と組み込んでゆく仕組みが、はじめから人間関係の中に備わっているといいようだろう。そうすると、そこには別の側面が浮かび上がってくる。偶然の出会いも含めて、次から次へと人間関係が拡大してゆくと、それらをすべて抱え込んでいては身動きできなくなる。積み重なってゆく義理と人情に縛られていては、新たな人間関係の構築にはおのずと限界が生ずるのである。そこで、すでにある人間関係の一部を休止させてそれに対応する。つまり自分を包み込んでいる人間関係のある部分をスリープ状態して、別の回路を作動させるのである。端から見ればそうした行動様式は「あっさりしている」「こだわりがない」「冷たい」という印象を持つかもしれないが、スリープ状態を解除して再起動させたら、その逆の「しつこいほどの」「濃厚な」「熱い」関係が出現することにもなる⁽¹⁵⁾。

ネサデュー村の人々がこうした環境に接続されているとすれば、彼らをはじめからその状態を目指して「アラブ」を名乗ったのか、あるいは結果としてそうなったのか判断はつきかねるが、その状況がもたらす結果についてはある程度予想ができる。世界中のさまざまに異なる「アラブ人」や「ムスリム」と接触することによって、世の中は多様であってよいことに気がつくはずである。そして多様なまま人と人が関係を結ぶことの当たり前さにも気づくだろう。それは翻って、自分の信仰や祖先への思いを誰に恥じることなく持ち続けることを可能にさせてくれる。むしろそういう思いが強化されれば、自信にさえなるであろう。

「アラブ」が「民族」であるならば、それは地理的にも、社会的にも、政治的にも世界大にどんどん拡散してつながりあってゆく「開かれた民族」ということができ、またそれは多様性と連続性を同時に保証する「やわらかな民族」といってもよいだろう。

おわりに

「グローバリズム」という言葉がある。あるいはそれがかえって地域色を鮮明にさせるという意味で「グローカリズム」という造語さえある。近代西欧に発した政治的・社会的・経済的・軍事的システムの行き着いた姿だとの認識がそこには共有されているように思う。そして近年の情報機器や交通手段の急速な発達によって人や物や資本が国境を越えて頻繁に行き来し、入り交じるという状態を想定としているように思う。つまり「グローバリズム」は長い道のりを経てたどり着いた前例のない現代の現象であるという認識は相当に根強い。本稿で述べたニューカレドニアの事例も、まさにそうした状態には違いない。たしかに事の発端はフランスの植民地主義から始まり、20世紀の近代化と帝国主義の時代に翻弄され、やがて「ポスト・コロニアル」な状況の中で運動が展開

されてきた。今やそこには世界中から集まった人々が入り交じって、つながりあっている。

だがちょっと立ち止まって考えてみたい。人が遠方まで頻繁に行き来し、さまざまに異なる人々が入り交じり、ある種の秩序がそこに生まれる、という状態は前例がないほど新しい現象なのだろうか。本稿の事例に則していうと、19世紀半ばにアルジェリア人がフランスによって強制的に地球の裏側に連れてこられ、やがてそこで、やはりフランス植民地に引き寄せられたインドネシア人や中国人と接触することになる。だが彼らの遭遇はそれが初めてだったのだろうか。否である。それよりはるか数百年も前からアルジェリアと中国やインドネシアはつながっていた。おそらく先に述べた「開かれた」状態でアフリカ西岸からメラネシアまではひとつながりの世界を形成していたはずである。人・物・情報・カネが地球規模で移動し、混在するという状態は前例のない事態どころか、むしろあまりにも当たり前すぎる人類の歴史だったと認識すべきなのである。

では問題はどこにあるのだろうか。こうした当たり前のことを当たり前に認識できず、あたかも人類がこれまでに直面したことのない新たな事態が生じていると考える発想そのものが問われなければならないだろう。国家や国境の存在を疑うべくもない自明の出発点においたり、民族や文化というかたまりを当然視したりする姿勢が、そうした発想を生み出したのは間違いない。そしてそれは近代西欧を世界認識と歴史認識の土台に据える発想でもあり、ふつうはそれを意識することすらない。

私はその認識構造が近代西欧そのものによって生み出されたものとばかり長いあいだ思い込んできた。しかしそうした発想が力を持つようになったのは案外最近のことではないかと思い始めていく。「国際化」や「グローバル化」「異文化理解」といったスローガンが声高に叫ばれ始めた時期である。本稿で取り上げた「文化多様性（文化多元主義）」などもそれに連なる。当たり前の現象に直面したとき、そうしたスローガンを叫ばなければならないほどに発想が硬直化していたのである。近代西欧を目の敵のごとく過小評価するのはナンセンスだが、かといって特別視するのもまたナンセンスである。過小でもなく過大でもないように近代西欧を世界史の中に位置づけることができたとき、こうしたスローガンの異常さが目につくのである。だがそうした発想を作り上げてきたのが、他ならぬ私自身の属す世代であったのではないかということに愕然たる思いがこみ上げる。ニューカレドニアの小さな村は、あらためてそうしたわれわれの世代の迂闊さと狭量さを教えてくれるように思う。

附記

本稿のもととなる現地調査は、平成21年度科学研究費補助金基盤研究(S)(研究代表者：西尾哲夫)『アラビアンナイトの形成過程とオリエンタリズム的文学空間創出メカニズムの解明』によって2010年1～2月に実施した。本稿は上記科学研究費補助金による研究成果の一部である。調査にあたっては西尾哲夫教授(研究代表者、国立民族学博物館)、小田淳一教授(東京外国語大学)、水野信男名誉教授(兵庫教育大学)の諸氏にお世話になった。お礼申し上げます。

注

- (1) おもに文化人類学者を中心とした議論としては以下がある。川田順造・福井勝義(編) 1988 『民族とは何か』岩波書店。また考古学・言語学・歴史学・民族学などの学際的アプローチとしては、以下がある。岡正雄・江上波夫・井上幸治(編) 1991 『民族の世界史1 民族とは何か』山川出版社。
- (2) こうした議論の出発点としては以下の論文参照。名和克郎 1992 「民族論の発展のために 民族の記述と分析に関する理論的考察」『民族学研究』57-3、日本民族学会。
- (3) 本節および村の初期の展開についての記述は、コリネの以下の論文に多くを負っている。M. Collinet 1978 “Les Arabes de Nouvelle Calédonie.” in *Bulletin No.36 de la Société d’Études Historique de la Nouvelle-Calédonie*. 3eme Trimestre. Noumea.
- (4) フランス植民地期のアルジェリアの歴史についてはおもに以下を参照した。シャルル＝ロベール・アージュロン 2002 『アルジェリア近現代史』(私市正年・中島節子訳) 白水社。また植民地期から現代にいたるアルジェリアの歴史の詳細は以下の新刊に詳しい。バンジャマン・ストラ 2011 『アルジェリアの歴史 フランス植民地支配・独立戦争・脱植民地化』(小山田紀子・渡辺司訳) 明石書店。
- (5) 「ベルベル人」というのは、7世紀にアラブ人がやってくる以前から北アフリカ全域に住んでいた「先住民」だが、その後の長い歴史の中で混血と文化的融合が進み、アラブとベルベルの区別は言語を除いてほとんど意味のないものになった。したがって「ベルベル語を話す人々」を「ベルベル人」と考えてほぼ差し支えない。しかしその呼称は今日のアルジェリアでは注意を要する政治的な含意をもつ用語になっている。詳しくは本文4(2)を参照のこと。
- (6) ネサデュー村の発展プロセスは、村が属すプーライユ市の市史といえる以下の書からうかがい知ることができる。『*Bourail:Il était une fois*』2004 Édition Thierry Darras。(非売品)
- (7) 同書。
- (8) 独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構 2010 『ニューカレドニアの投資環境調査 2008年(戦略的鉱物資源確保事業報告書第4号)』(p.7)
- (9) 津田睦美 (2011年10月21日閲覧) 「ニューカレドニアの日本人移民とは」
<http://www.mutsumitsuda.com/about-nc/>
- (10) 小田淳一 (2011年10月21日閲覧) 「天国に一番近い島に流された「アラブ人」たち」
<http://meis2.aacore.jp/天国に一番近い島に流された「アラブ人」たち-2.html>
- (11) E.ホブズボウム・T.レンジャー(編) 1992 『創られた伝統』(前川啓治ほか訳) 紀伊国屋書店。
- (12) 西尾哲夫 2010 「ベリーダンスを踊ると体が笑う アラブから世界へ」『アラブの音文化 グローバル・コミュニケーションへのいざない』(西尾哲夫・堀内正樹・水野信男/編) スタイルノート。

- (13) アルジェリア独立後の言語政策と文化政策については以下に詳しい。Stora, Benjamin 1994
"Histoire de L'Algerie depuis L'Independance." Éditions La Decouverte, Paris.
- (14) カピール人による「アマズィグ運動」の展開は以下に詳しい。宮治美江子 2006 「アマジグ 言語と文化の尊厳とアイデンティティを求めて」『講座世界の先住民族 ファースト・ピープルの現在 04 中東』(松井健・堀内正樹/編) 明石書店。
- (15) 偶然を既知へと取り込む仕組みについては、現在国立民族学博物館で実施している共同研究「非境界型世界の研究 中東的な人間関係のしくみ」(研究代表者:堀内正樹)の席で西尾哲夫氏(国立民族学博物館)からヒントを与えられた。また人間関係を切ってゆく、あるいは休止させることの重要性については、同研究会で大坪玲子氏(共立女子大学)の発表から示唆を得た。両氏に感謝申し上げる。